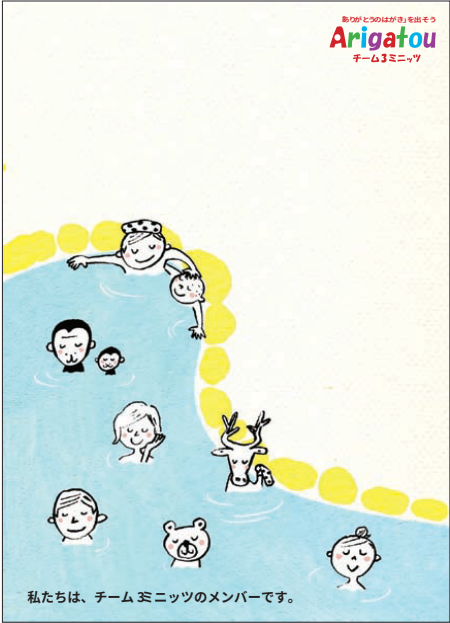


あしながおばあちゃんからの「遺族年金」でつくられた、今月の「ありがとうのはがき」



「遺族年金」という名前の年金があることを知っていますか。

「遺族年金」とは、戦争に動員された兵士が戦死した後に、その妻に終身支給される年金をいいます。いまの平和の時代に、そんな遺族年金がいまだに支給されていることに若い方たちは驚くかもしれませんが、太平洋戦争が終わって 60 年数年たったいまでも、遺族にその年金が国から支給されています。

和歌山に暮らす 88 歳の「あしながおばあちゃん」の H さんから電話を受けたのは、4 月中ごろのことでした。

H さんは、「ありがとうのはがき」をひ孫か

らもらって、チーム 3 ミニッツの活動を知りました。でも、足腰が弱くてチーム 3 ミニッツの活動に参加できません。そこで、戦争で亡くなった夫の遺族年金を送りますので、そのお金で「ありがとうのはがき」を作ってくれませんか」と連絡をくれました。私たちは、喜んで H さんの意思を活かす「ありがとうのはがき」を制作することを約束しました。

H さんは続けて「夫は戦争で亡くなったけれど、こんな悲しいことが二度とおきないように、「ありがとう」の言葉の大切さを、多くの方たちに伝えてください。このお金でひとりでも多くの人に、「ありがとう」の言葉を届けてもらえたら、天国の夫が一番喜ぶと思います」と話してくれました。

チーム 3 ミニッツは、金額の大小は関係なくその意思を活かすために、H さんの名前をいれた「ありがとうのはがき」を製作しますといいましたら、名前は匿名でいいですよ」と答えられました。

それから、チーム 3 ミニッツ スタッフとイラストレーターの桜井美奈子さんとの、あしながおばあちゃんの「ありがとうのはがき」づくりが始まりました。今月のはがきは、その中から 3 種類のイラストで構成されていますが、今後順次、あしながおばあちゃんの「ありがとうのはがき」を皆さんにお届けする予定です。

私たちは戦争を経験したことがありません。いま平和な社会にどっぷりとつかって日々を安泰にすごしていますが、この平和は先人たちの犠牲の上で成り立っていることを忘れることは出来ません。あしながおばあちゃんの言葉に「こんな悲しいことが二度とおきないように、「ありがとう」の言葉の大切さを、多くの方たちに伝えてください」とありますが、この重みを多くの人が共有することで、多くの「ありがとう」が生まれてくるように思います。そんな志の人たちと共に、チーム 3 ミニッツは少しずつ前進を続けています。

60 歳を前にして私財を注ぎ込み製作された映画「北辰斜にさすところ」ここにも忘れてはいけない「ありがとう」がある



還暦を迎えた団塊の世代には、次の世代に伝えたい志、残したい想いがあります。大阪在住の人物が、故郷で映画作りに挑みました。その人の名は廣田稔さん（62）。職業は弁護士。映画の世界とは無縁の人です。

映画の主人公は、旧制高等学校の野球部ピッチャー。時をへて高校生の孫に自身の思い出を語ります。当時の若者の青春と友情を通し、教育のあるべき姿、そして、戦争がもたらした根深い心の傷をこの映画は描いていきます。監督は「ハチ公物語」の神山征二郎さん。そして、三國連太郎さんや緒方直人さんらが出演しています。舞台は、廣田弁護士の故郷九州です。

1960 年代、華やかな銀幕の世界に人々は熱狂していました。戦後間もない 1946 年生まれの廣田少年にとっても、父親に連れられて行った月に「度」の映画の日は特別なものでした。そしていま、還暦を迎えた廣田さんは、人生を振り返り、次の世代に残していきたい志を形にしようと、私財を注ぎ借金までして映画を作りました。

廣田さんがこの映画を語るとき、必ず触れるシーンがあります。出兵したまま帰らない仲間のことを、晩年の主人公が孫に語る、「亡の先の海の中にも帰ってこれん者もん」が、いっぱいいるんだ」というシーンです。廣田さんの叔父も、戦場から帰還できなかったひとりでした。

廣田さんは「自分の幸せだけでなく、世の中の幸せのためにやっつけ」と、4 万 6000 体が問にかけてくる映画にしたい」といいます。



この映画の主演を務めた三國連太郎さんも、「4 万何ぼの白骨が、1 体も帰ってこない。ああ、このセリフがいいな」と思いまして。生意気なことはいえませんが、次の世代に責任を伝えていける、そして、次の世代が平和になっていくということになればいいかなと思っています」と話しています。

三國さんは、中国大陸の前線へ送られた兵隊のひとりでした。部隊は総勢千数百人でしたが、生きて再び祖国の土を踏めたのは 230 人にすぎなかったといいます。そんな人々の志を、映画というメディアに凝縮したのが「北辰斜（ななめ）にさすところ」です。

北辰斜に」とは、旧制第七高等学校造士館の寮歌のひとつで、全国に知られる「北辰斜に」の歌詞「番の最初のフレーズです。北辰」とは北極星のことですが、鹿児島では北極星が北天の仰角 3 度 36 分の方向に見えることから、鹿児島は「北極星が斜めに見える（さす）ところ」といわれています。

この映画は、明治時代に始まり戦後の教育改革で廃止された旧制高等学校で、豊かな自由のなかで学問に励みながら、誇り高き精神を仲間と共に育てていた生徒たちの今と昔を、野球の因縁試合と戦争の傷跡を軸に描き出した秀作です。晩年の勝弥役には、自身も中国への出征経験のある三國連太郎さんが扮し、悲痛な面持ちで戦争に対する怒りと苦しみを全身で表現しています。

三國さんは、この映画で「亡の先の海の中にも帰ってこれん者もん」が、いっぱいいるんだ」という科白をいうために出演したと語っていますが、ここにも、いまの私たちが安泰に生活できる「ありがとう」の背景があります。（写真：北辰斜にさすところ」製作委員会）

* 「北辰斜にさすところ」の上映は、昨年から今年にかけてほとんど終了していますが、大阪「千里セルシーシアター」で、8 月 8 日（金）～ 2 日（木）まで再上映されます。